二つの野営地―旧北部州の伝説

ウィリアム・ギルモア・シムズ作
中村正廣　訳

1

「これら森に生まれし、
森に育てられし者たち、勇猛果敢な民族、
大胆不敵で裏心のない、足枷もない、
危険なときにも気概を失わぬ者たちよ」

プロの小説家なり物語作家が執筆を続けていく中で、助力を仰ぐつもりは毛頭なく、また恐らく助けを当て込んだりすることなど思ってもいないとき、隣人が助勢に駆けつけることはよくあることである。しかしながら、この大層な御仁はよく八十代のご老体であったりするのだが、相手に話を聞けと迫るのは自分はもはや聞く耳を持たぬということから生じているらしく、男であれ女であれ、とにかく自分がその目

で見たか、もしくは曾祖母から聞いたある有名な事件なりある驚嘆すべき事実なりを所持しており、これこそまさに歌や物語に編み込まれてしかるべきものだと思い込んでいる。その素材が自分の頭にすっかりこびりついてしまい、自分が恩恵を施そうとする相手の小説家が自画自賛のトランペットの音が届かぬところに居を構えているとなれば、縦四十センチ、横三十センチほどの固い紙に三枚ほど物語を書き付けて郵便で送ってよこすのだが、十二セントか二十セントの安価版で作品を売っている不運な作家が一ドル六十二セントの郵便料を支払わなくてはならなくなる。ところが不運は重なるもので、この苦心の作も百例中九十九例までが一文の価値もないことがよくあるのである。ただの暴力行為であるか、単なる殺人事件であるか、頭蓋骨を銃の台尻か棍棒で叩き割る話であるか、はたまた、短刀か鞘付き猟刀で腹部に八センチほど、いや下脇腹の辺りを手当たり次第に人知れず突き刺すといった話の類である。相手は命を落とし、殺人者はテキサスへ高飛びするか、すぐさま捕まって道中旅をやめてしまうかで、とにかくそこで話は終わってしまう。それが事実であることは間違いない。事件は語り手が自分の目で見たものか、兄が見たもの、いや、もっと確かな証言とは言えないまでももっと厳粛な証言かもしれず、語り手が見る目を持ち得るずっと以前に語り手の祖母が見たものかもしれない。このような状況は雲霞のごとき目撃証人によって証言を与えられており、厳粛な誓いを立てて語られる真実なのだが、しかし物語作家にとっては全く価値を持たぬ代物なのである。このような主張は多くの人たちの一般通念とは相容れぬところがあると思われるかもしれない。ホメロスの時代から今日まで、暴力行為がほとんどあらゆるフィクションに記録されてきたことは常識であり、彼らはこれこそがすべてであるという性急な結論を下し、芸術家がありふれた事件に新奇な性質を与える、つまり非日常的な事件に変化させる労力を見落としてしまっているのである。

フィクション作家の側からすれば、この世で最も困難を伴わないことは何かと言えば、それは暗殺者と棍棒を見つけることである。芸術とはこの二つを頃合いを見計って適所に配置することであり、そしてひとつの事実が別の事実と衝突せぬようにして謎を生み出し、好奇心を喚起し、話の結末について疑念を抱かせつつ大団円を生じせしめることであって、これらを自然であると同時に思いもよらない方法で行うのである。だからして、実際はガチョウの巣を見つめているだけなのに大発見をしたと思い込んでいるご聡明な方々には、いかなる事実であれ、いかなる伝説であれ、皆の好奇心を既に喚起してきたある歴史についてそれが新たな説明を加えることができなければ芸術家にとってはいささかの重要性も持たないということを丁重にご忠告申し上げたい。ジョンがベンを殴り打撲傷を与えた、それでベンが今度はジョンに発砲し鎖骨と脊椎の間に十一発ほどの弾丸を見舞ったとかいった類、左の乳首の下を刺したとかいった類の話、いや刺すところはどこでもいいのだけれども、このような類の単なる残虐行為は歴史の助けを借りなくとも小説家であれば歴史に負けずたやすく案出できるものである。いや、このようなことであればこの際行く手に正確な事実などない方が芸術家にとっては望ましいことだろう。その方が武器の選択において画趣をそそるようなことを考慮に入れることができるであろうし、もろびとの吟味に耐えうるような細部を重視することができるからである。今この時点でかような苦言をそれとなく申し述べるのは至当なことだと私など思うのだが、それは自分自身を守るためであると同時に私の仲間のためでもある。昨今は不景気なご時世であり、郵便局も兌換紙幣で料金を要求してくる。文学者が年中不要なことに金を出す余裕などないことはご承知の通りである。それに常に手に持て余すほどあまたある品の金の立て替えを要求されることほど不当な扱いはなく、私のこの僅かな仄めかしによって幾分それが減少することを期待したい。

であるから、私が次のことを世間に対して言明してもプロの同業者なら当然賛成してくれるものと信じて疑わない。即ち、これから先暫くは尽きることのない「悲惨な不幸」は私たちの手許にあるということ、私たちのところにある「水陸での哀れな事故」は特に数が多いこと、そして「間一髪のところで助かる話」[1]については一世紀はもつほど十分にあること、である。殺人や同様の事件は今日ではもっともありふれた出来事に入るけれども、俗悪な代物と断言してよい。それに月刊誌のお陰で上品な嗜好を持つようになった純文学の愛好者からすれば、棍棒を使っての殴打と打撲傷とくれば、それは野蛮であり、かつまた不自然極まりないものでしかない。

しかしながら、これまで私が述べてきたように事件商人が小説家に提供する素材の性質は価値のない代物であることが多いことは多いのだが、時折私たちは幸運に恵まれることもある。心から時間をかけてもいいと思う類希な記録を持ち前の経験のストックから紐解いて見せてくれる、かくしゃくとした白髪の隠遁者のような人を、奥深い森のあちこちで見つけることもあるのである。そのような人物は自分の行為に生気を吹き込むことができる。彼の言葉に耳を傾けつつその行為を目の当たりにすることも可能になる。事実という屍の代わりに事実が持つ活気ある息吹を手にできる。生命を喚起し生命を連想させる点において霊妙不可思議な上に意気軒昂、その息遣いが感じ取れ、燃え立ち、みずみずしくもある。この種のものにホースシュー・ロビンソン[2]のあの見事な個性的な物語がある。これが世に出たのはケネディのお陰であるが、ケネディがこの話を書くことができたのはその尊敬すべき主人公のお陰なのだ。これからお話しするスケッチの主題はそれと比べて異質ではない情報源に頼ったものであるとここで私が明言したとしても、先ほどの優れた国民的な物語と関係があるとお考えにならぬよう読者の皆さんには御願いする次第

である。比較を求めたり強要したりする意図や望みなど当方には全くない。

2

ノースカロライナとサウスカロライナの北の州境に今も暮らしている老人の中には、あの尊敬すべきダニエル・ネルソンという人物の在りし日の姿を記憶に留めている方もおられるだろう。老爺はついこの前の一八一七年まで在世しており、その頃彼はミシシッピに移り住み、転居して三ヶ月も経たぬうちに帰らぬ旅の人となった。老木移植に耐えず、移植すればまもなく息絶えるとはまさにこのことである。若かりし頃ダニエル・ネルソンははるばるヴァージニアからやってきた。ノースカロライナの南の州境、いや少なくとも彼が後に人生の大半を過ごした地域に入植した最初の開拓者の一人であった。

当時この地方は密林であったばかりかインディアンの人口密集地帯でもあった。数部族のインディアンのお気に入りの猟場ともなっていた。しかしこのような状況に若いネルソンが怯むことはなかった。その頃の彼は雄々しい若者であり、胸幅は広く、上背に恵まれ、ぎらぎら光る目とこれとほとんど負けぬくらいに激しい気性の持ち主であり、まさしく大胆不敵な気魂の持ち主であった。仲間の数は少なかったが、その彼らも彼と大して変わらぬ連中だった。ダニエル・ブーン老[3]の気概は現在の人間の想像を絶するほどに当時はよく見受けられたものであった。冒険に彼らの心は喜び勇み、興奮を覚え、危険はただ彼らの果断に富む気概を刺激するばかりであった。苦難こそ彼らの体躯が求めてやまないものに見えた。それは酒に劣らず彼らを生き返った気持ちにさせてくれた。獲物を求めて一帯を探し回っては何匹かを殺し、当

時ふんだんに獲れた熊肉や野牛、鹿や七面鳥を少し口にすると、新しい地方で勇敢な森人が最も必要としたもの、つまり元気のいい恐れを知らぬ妻のもとへ帰って行った。彼女たちは聖書に出てくる乙女[4]と同じく愛する夫の行くところならどこであれ付き従った。大胆なこの若い猟師たちは、文明の地に程近い安全地帯から遠く離れた地域に居を構え、その土地で幼い子供たちを育てるのを恐ろしいとも何とも思わない連中であった。インディアンに遭遇し、彼らと知り合いになり、友情のようなものを結ぶことになったが、強壮な体躯の持ち主であり勇猛果敢で優れた武器を擁していたこともあって、野蛮人を見下すようになっていたのかもしれない。しかし彼らは野蛮人に騙されて相手を過信することはなかった。丸太小屋は時には砦となるよう作られており、一人が敵に包囲されたら二十四時間もすれば他の連中が救助に駆けつけることが必ずできるよう、互いに離れすぎることがないようにして暮らしていた。さらに、一冬越すのに十分な熊肉と鹿肉の蓄えが絶えず手許にあり、これらの砦のいずれもが、通常の見立てからすれば、近隣を歩き回る少人数のインディアンの一団の攻撃には十分耐えられるはずであった。このようにして大胆な開拓者たちは土地を手に入れ、さらに強大な世代のために道を切り開いていった。放浪好きで、農場での退屈な労働を嫌がるところはあったが、それでも農場でやるべき仕事に全く無頓着であったわけでもない。季節が過ぎるたびに彼らの平野の地方はどんどん大きくなり、毎年増大する快適な暮らしは入植者たちの文明の増大を物語っていた。熊肉と比べてトウモロコシが多くなり、無断居住者たちは親密な友誼を結ぼうとするインディアンですらさながら敵のように見ていたときのあの最初の不安にもほとんど無頓着になっていった。入植して五年、彼らが野生の隣人から危害を加えられることは一度もなく、また悩まされることもごくわずかであったため、五年の歳月が過ぎると、彼らは自分たちを取り巻く状況の安泰に

自信を抱くようになったが、十分な理由と根拠がなかったわけでもないようである。

ところが折しも情勢は一変し、この恵まれた平穏の前に大きく立ちはだかるかに思えた。インディアンたちは不満を昂じさせつつあった。白人の大集落と頻繁に接触する機会が多かった他の地域の部族の中には、取引において白人に不当な扱いを受けたり飲酒のためにすっかりやる気を失った部族が幾つかあり、自分たちが受けた苦痛と権利侵害について不平を鳴らし、またこちらの方が恐らくもっと多かったのであろうが、自分たちの目に触れることは許されても享受することは拒否された、少なくとも制限された宝が山と積まれているのを目の当たりにして、これを貪欲に手に入れようとした。彼らの欲望と不満は決まって感応し合うもので、それは内陸部の彼らの同胞に伝わっていき、我らがお歴々のホー川[5]沿いの開拓者たちはこれまで異人種間の接触の中に必ず見られた平和的関係が一変することを警告するような幾つかの兆しに不安を覚えざるをえなかった。同様の物語を幾度となく耳にされている読者の皆さんはよくご存じのはずで、この兆候の数々についてここで逐一述べたり状況説明をする必要はないだろう。今私がお話している小さな植民地はこれらの兆候をしっかり掴んではいたが、ダニエル・ネルソンほど素早く察知することができる者はなかった。ただ彼は気がかりではあったものの、これに不安を覚えることはなかった。不安を口にして妻を怯えさせることがないよう気をつける一方で、彼は立派なご亭主よろしく最悪の事態に対応する心構えを妻にさせることは必要だと考えた。この仕事をやり終えると、彼は幾分ほっとした気分に浸った。ただ、その夜五歳になった娘を膝に乗せ、母の膝に抱かれた幼子の息子を眺めていると、不安が昂じてくるのを抑えることができなかった。そこで彼はその晩、ここ暫くやめていた、小さな植民地を最初に作った頃から厳戒態勢の一つの方策として慣行となっていた見回りを再び始めた。夕食をすませ

るとすぐに彼はライフルを再び手に取り、大型狩猟ナイフをベルトに突き刺してから首に角笛を下げると、忠犬のクリンチを呼び寄せ、集落の近くを取り巻いている森に異常がないか見回りに出かけた。巡回は猟師がよく使う忍び足で注意深くなされたが、少しばかりの時間を要した。その夜は晴れ渡り、星は明るく、天気は穏やかであったから、落ち着かぬ彼は覚悟を決めて森を通り抜け、四マイルほど離れたヤコブ・ランサムの村落に行き、彼に、そして彼から他の者にも今必要だと自分が考えている安全対策を絶えず講じるよう促すことにした。この夜彼が体験した冒険についてこれから先はネルソンに自分の言葉で語ってもらうことにしたい。彼が晩年この物語を千回も繰り返し語ったという噂があるからだが、当時彼は片足を墓に突っ込んでおり、そのような彼について偽証の罪、つまり自身が堅く信じていないことを語っているという罪を犯していると考えようものなら、彼を知る人にとってはこの世ではあり得ぬ途方もないことでしかないだろう。

3

「さてと」当時七十歳であった歴戦の強者は背筋を目一杯伸ばすと右腕を前に突き出し、左手で古いライフル銃の銃口を掴んでその台尻を床に置いて揺り動かしながら言った、「あれは風ひとつない晴れた晩じゃった。眠れそうにもないわしはクリンチを呼んでジェイク・ランサムの家へ向かったんじゃ。ジェイクはすぐ眠たくなる奴でな、うたた寝しておるところをインディアンが襲うとすればきっとあいつに違いないとわしはわかっておった。じゃが本当のとこを言うと、あいつの為というよりみんなの為、つまり仲

間とわしの為だったんじゃ。なにしろ、一緒に事に当たらんことにゃ、ベッツィや赤ん坊たちの長い金髪を顔に色を塗った部族の悪魔連中が両手の親指でいじり回すのをなす術もなく見る羽目になる日もそう遠くないと思えての、いやあのときのわしの思いを言葉にすることはできんが、そんなこたぁ人間のやることじゃない、わしは人の子としてひどく身震いしてしまったんじゃが、あれは狼のやることじゃ、わしは髪の毛が内側に折り曲げられて心臓目がけてごしごしこすりつけられるような気持ちじゃった。立ったまま星を見上げたわしは、最後は神の御手とお慈悲にすがるしかないと思っての、祈りを捧げたんじゃ。こんな風に考えると気持ちが落ち着いてきての、わしは暢気に構えて先へ進んでいったんじゃ。昼間と同じくらい夜でも道はよくわかっておったからじゃが、と言うても、それほど急ぎ足でもなかったの。ずっと敵に目を光らせておったからの。さてと、犬と二人で小さな峡谷と渡るのも難儀な川のある森のところまでやって来たんじゃが、ジェイクの家に向かう道は二つあって、一つは盆地を通る道、もう一つは小さな山を幾つか越えて行く道じゃった。訳を訊かれても答えられんが、そのときわしはしかと考えもせんで山を越えて行ったんじゃ、どっちかと言うとそっちが一番長くかかる道だったんじゃが。

「それでもわしは進んで行った。クリンチはわしの後にぴったりくっついておった。あいつはなかなかの犬での、狩りには似合いの、それは鋭い嗅覚を持っておったんじゃが、あんときに限ってその気は全くないようじゃった。丘といってもかなりな丘でな、歩いていくにはかなりの道のりじゃ。暫くしてわしはお天道様が顔をお出しになってからずっと森を歩きづめだったことを思い出したんじゃ。可哀想なクリンチがあんな風になってしまったのも、前に進もうとしないのも、飲み込めたんじゃ。しかしもう道の半分は来てしまっておったから、伝えたいことも言わんで引き返すつもりはなかった。さてと、丘の頂上まで

やって来たわしは足を止めて目をこすった。目をこする訳があったんじゃ。というのもじゃ、少しばかり離れたところに何か見えたんじゃ、大きな火での。最初はジェイクの家かもしれんと心配になったんじゃが、あいつは左の方角に住んでおるし、火が見えるのは右手の方じゃ。すぐにこれに気づいたわしは、わしの家の方が近いと思って、目の前のものにわしは怖じ気立ってしもうたんじゃ。しかしじっと眺めて突っ立っておるわけにも、ジェイクの家に向かうわけにもいかん。クリンチの奴はひどく気乗りがしない素振りを見せたんじゃが、わしはやって来た道から外れて火の方目がけてまっしぐらに道を走っていった。道と言うても道らしい道はなかったんじゃが、木が密集しているわけでもないし、土地は痩せていて下生えもない。で、割と楽に前へ進むことができたんじゃ。じゃが、疲れのせいやら恐怖心やらで、少しも前へ進んだ感じはせん。火はまだ勢いも衰えず明るく輝いておったし、火との距離も縮まってはおらん。これに気づいたわしは足を止め、クリンチに目をやると、あいつも足を止め、わしを見た。どっちも何も言わんかった。さてと、わしは少し考え込んでしもうたが、ここまで来てあきらめれば大した男じゃないような気がしたから、がむしゃらに突き進むことにしたんじゃ。小さな丘を一山と言わず越えたわしは、そこを下って盆地を抜け、それからまた丘を登っていった。ノリーハッチィとインディアンが呼んでおった小さな山にやっとこさ辿り着いたわしは、そんとき火が急に止まったような気がしたんじゃ。火は二百ヤードとは離れてはおらん正面のわしの足の下の小さな丘で赤々と燃えておる。普通の野営の火じゃが、かなり大きくてな、インディアンが火の周りを囲んでおるんじゃが、その数がまた一ダースどころじゃないんじゃ。『全く』とわしは思った、『こりゃ大変な不意打ちを食ろうてしもうたもんじゃわい。しかし、どうしたもんだか。開拓地でこれに気づいておる者はわしのほかには誰もおらんから、皆油断しとる。寝込

みを襲われて一人残らず頭皮を剥がれるか、でなければおっそらく炎で目を覚まして家から逃げ出したところを矢で撃たれるかするのが落ちだ』そう考えると冷や汗が出てきて止まらないんじゃ。どうすればいいか、考えることもできん。後ろを振り向いてクリンチの奴を見ると、全くもって不思議なことじゃが、あいつはしゃがんだままじっと静かにしておってな、わしと星を見ておっても、目の前の火は目に入っておらんようなんじゃ。ところでじゃ、クリンチは猟犬としては名を馳せた立派な犬での、インディアンを追跡することにかけちゃ誰にもひけはとらん奴じゃ。わしの流儀、わしがやろうとしていることがわかる奴でな、わしの望み通りに吠えたり黙ったりしたもんじゃ。じゃからあのとき、あいつが吠えんのも余程気の利いたことだったんじゃが、忌々しいことにあいつは見てもおらん風なんじゃ。ところでじゃ、クリンチの奴は一言もしゃべれんが、それでも開拓地の中であいつほど素早く熱心に思慮分別を見せたがる犬はおらんかった。そのあいつが目の前で起きていることがわからず気にもかけておらんような顔をしておるんじゃ。目はぼーっとして眠たそうでどんよりとしておった。全くあんなとき頭のいい犬じゃとても考えられんことじゃった。そこでわしは少し頭にきてあいつを見たんじゃが、あいつはわしの目を見るとただ大の字に寝そべり、鼻を足に載せるとぐっすり寝込んでしもうたんじゃ。わしはあいつの頭にナイフの柄を振りかざしてやろうとも思ったんじゃが、もっとじっくりと考えてみた。確かにあいつが火に近づいて体を暖めようとせんのが不思議でならなかったんじゃが、人間と同じで犬というものも何でも我慢できるもんじゃないことを思い出したんじゃ、それにインディアンがわしたちともう親密な状態にないことをあいつは知る由もなかったからな。それでわしはどうしたものやら考え、途方に暮れたまま、じっと見つめながら、かなり長いことそこに突っ立っておった。うろたえるばかりじゃった。ようやくわしはあやふ

やにしておくわけにもいかんと思っての、それにいつまでも最悪の事態を避けて通るわけにもいかんから、わしは一気に前進する覚悟を決めたんじゃ。昔は猟師としてなかなかの腕前じゃったわしのことじゃ、野営地に忍び足で近づいていったのは言うまでもないじゃろう。四つん這いになったり、身を隠す木や藪がないときは地べたに這いつくばったりしてな、わしは必死じゃった。クリンチはぴったりと後に付いては来るが、わしが何を狙っているのかさっぱりわからんようじゃった。すんなり行くことでもないからの、ゆっくりやったんじゃが、少しばかり気がせいておってな、石橋を叩いて進むわけにも忍び寄ることもできんかった。戦時で近くに敵が潜んでいるときであれば、若い奴に用心して進むよう忠告するわしじゃろうが、そんな用心も捨ててわしはせわしく進んでいったんじゃ。で、前へ進んで行くと、例の火は刻一刻と大きさを増し、火の回りのインディアンの姿がますますはっきり見えてきた。もうもうたる煙でな、どんなに近寄ってもインディアンの人影しか見分けられんし、その人影も時々煙に包まれてしまってせいぜい半分ほどの数しか一度に目に入らんかった。欲しい情報が手に入るところまでやって来たとき、わしはやっと足を止めた。目の前にかなり大きな岩があったから、わしはそれに両肘を乗せてじっと眺めた。火からせいぜい三十メートルぐらいしか離れていない岩でな、間には茂みがあって、その茂みのせいやら煙のせいやらで数分経ってようやく一人一人を見分けることができたわしは、連中が何をしているかわかったんじゃ。しかし見えてもそれは一瞬のことでな、すぐにひと吹きの煙が連中を包み込み、前と同じく見えづらくなってしもうた。しかしどうにかこうにかして目を凝らして見ると、目に入った光景はわしを心の底まで震え上がらせるものじゃった。なにしろ赤い連中の間に見えたのは一人の白人で、その白人は女だったからじゃ。本当じゃ。そこにはインディアンたちがおって、背中を見せている者もあれば、顔をわ

しの方に向けている者もある。そこに少し片側に寄ったところに、連中の間に女がおるんじゃ。風で煙が吹き飛ばされると、星のように輝いている白い顔が雲のような煙の間から光り輝くのが見え、顔は青ざめ死人のような感じに見えたんじゃ。恐怖の余り女は死んでしまうんじゃないかと考えると血管中の血が凍る思いがしたんじゃが、しかし実際は違ったんじゃ。女はきちんと座っていて周りを見回しておる。しかしインディアンたちは微動だにせんのじゃ。最初見たときと同じで、連中はただ座っているか横になり、何もせず、何も言わず、ただわしの肘の下の石に負けないぐらいにじっと動かずにおる。ただそこに突っ立って見ていることができなくなったわしは、再び這いながら少しずつ近づいて、連中の顔を見ることができるところまで進んでいった。しかし戦争化粧やら煙やらで、一人のインディアンも見分けることはできんかった。連中の姿形は野牛の毛皮や毛布に包まれていて十分はっきりしているように見えるんじゃが、顔はいつも暗がりの中にあってぼんやりしているんじゃ。しかし女の場合は違うた。女はどんな女かはっきり見分けることができた。非常に若い女じゃった。年のころはせいぜい十五歳ぐらいで、その面立ちはわしが大変よく知っている女のそれに見えた。きりっとした目鼻立ちでな、髪は背中の方にだらりと垂らしておる。女を見るとわしの心はおかしくなった。わしは子供のように意気地なしになってしもうた。わしはその娘っコのためなら死ねると思ったんじゃが、わしにはライフルを肩のところまで持ち上げる力もなかった。眺めれば眺めるほど弱気にとりつかれる始末じゃ。なにしろ時間が刻一刻と過ぎていけばいくほどその可愛そうな子供はわしにとって大事に思えてきたからじゃ。しかし何より奇妙だったのは野営地のインディアンが誰一人身動きひとつしないということじゃ。一言も話さず、足も指も全く動く気配はない。ただそこに、火の回りに彫像のように座ったり横になったりしているだけで、娘っコをただ見つめ、

娘っコの方は連中をじっと見ておるんじゃ。あのときほど恐ろしくなって弱り果ててしまい、進退きわまったことはなかった。さあどうするかじゃ。近くまで来ておったから、連中の一人ぐらいはナイフで心の臓を一突きしようとすればできたんじゃが、しかしナイフを振りかざす勇気もないんじゃ。自分がどこにいるのかわからないまま、わしは童のように泣き出してしもうた。ところがじゃ、わしが泣いてもあいつら見回すこともせんのじゃ。ただ哀れなクリンチのやつがわしに飛びついてきて、わしを慰めようとしているかのようにクーンと泣いてみせただけじゃ。何をやっているのかわからないまま、わしは犬をけしかけて野営地に向かわせようとしたんじゃが、あいつはわしの言っていることがわからんようじゃった。捨て鉢になったわしは、というのもあれは怯えが高じて出てきた狂気としか言いようのないものじゃったが、わしはこんな妙な惨めな状況に苦しむぐらいなら死んだ方がいいと思ってな、連中が座っているのが見えたところを目指して捨て身で飛び込んで行ったんじゃ。

4

「とても信じてはもらえんじゃろうが、そこにはインディアンも若い女も誰一人おらんかったし、火もないんじゃ。ぱっと燃え上がる炎と煙を最初目にしたところにただつっ立っておったんじゃが、物影ひとつもないんじゃ。前方を見やって辺りを見回したんじゃが、火は跡形もないんじゃ。わしが立っておった辺りは周りと同じで一面枯葉で覆われておった。頭がぼうっとしてな、妙な夢から覚めて辺りを見ると何も見えないじゃろ、あれと同じじゃった。辺りは暗くて静まり返っておって、頭の上には星がいくつも出

ておったが、明かりと言えばそれぐらいじゃった。わしはますます恐くなってきて、自分の力ではどうにもならんと思う人間が偉大なる全能の神に助けを求めるのはいい習慣じゃから、わしは跪いて祈りを捧げたんじゃ。その晩は同じことをこれで二度やったことになる。森で祈りを捧げたのは確か森の中で二度目じゃった。祈ると力が湧いてきた。これはわしに与えられた意味のある兆候だとわしは確信したんじゃ。それでわしは一度振り返ってから辺りを見回し家に戻ろうとしたんじゃが、そのときクリンチの奴が耳をピンと立て目を覚ましたんじゃ。わしはあいつの背中を軽くたたいてナイフの準備に取り掛かった。あいつを起こしたのはパンサーかもしれん。相当離れた場所でもあいつはその獣を嗅ぎつけることができる奴じゃった。ところがじゃ、あいつは怯えている風も見せず、ただ元気づいているという感じなんじゃ、それで恐れることは何もないことをわしもわかったわけじゃ。すぐにあいつは走り出し、果敢に突進していった。後を追いかけたわしが丘を二十歩ほど下りて盆地まで行くと、うめき声のようなものが聞こえてきたんじゃ。それでわしの足取りも速くなっていってな、犬に追いついたわしを、あいつは池のようなものがある窪地のたもとまで連れていったんじゃ。クリンチの奴はうめき声に向かって走っていったが、もう一度うめき声が聞こえたんで、わしも同じ方向へ向かっていった。犬のところに行ってみるとあいつはわしが生まれる前に倒れて水にほとんどつかっている老木の根元のところにおった。わしは老木に飛び乗って、二三歩前に進んだんじゃが、わしの目に入ってきたのは何と人間なんじゃ。それも両脚を水の中にだらりと垂らし頭を伏せたまま丸太の上にほとんど縦に寝ておるんじゃ。犬を呼んで退かすと、わしはそこへ急いだ。うめき声はほとんどとぎれることなく聞こえてくる。前屈みになってその相手に両手を置いたわしは、髪の毛を触ってみたんじゃが、相手はインディアンじゃった。頭は血でねっとりしておって、わ

しの指にくっついてくる。相手の顔を見ようとしてわしが頭の向きを変えようとしたとき、うめき声は前よりも太く低くなった。じゃが、指をくわえて見ている場合じゃない。わしは男を抱き上げ、両肩をあてがってな、その老木はぬるぬるしていてどっちかと言うと滑りやすかったから、老木に両脚をしっかりと据えてこの可哀想な男を運び出したんじゃ。それほど難儀することもなかった。男は上背はあったが、体は重くはなく、十四歳か十五歳の少年にしか見えんかった。不思議なのはこんな若者がどうしてこんなひどい目に遭うたかということじゃ。ともかくわしは少年を運び出し、枯葉の上に寝かせた。うめき声が止まったんで駄目かと思ったんじゃが、心臓を触ってみるとまだ暖かいし、はっきりというわけじゃないが、指の下で鼓動を感じ取ることができたんじゃ。何をすればいいかが次の問題じゃ。わしは先へ進むのはいやじゃなかったんじゃが、夜もかなり更けておったし、一日中歩きづめじゃったから、これだけ重いものを背中に背負っていくことを考えると二の足を踏んでしもうたんじゃ。しかしこのままほっといたら必ず死んでしまう、こんなところにおっぽりだすわけにもいかん。もしもわしの息子がこんな羽目に陥っておって、他の者が家に戻って夜明けを待って助けに戻ってきたりしたら、わしがそれをどう思うかとわしは考えてみたんじゃ。わしは祈りを捧げたばっかりじゃったが、いいや、この若者をほっとくなんて、畜生わしにはそんなこたぁできねえ、とわしは言った。腹帯を絞めたわしは精魂込めて若者を両肩に担ぎ上げた。わしの小屋までは三マイルはたっぷりあったはずじゃ。わしが家に辿り着き、可哀想なこの男を暖炉の側に置くまでどれだけわしが難渋したか、どれだけ重荷のためにへばっておったかわかってくれるはずじゃ。わしはそれからベッツィを呼んで、まだ命の残り火をかき立てることができるかどうか、二人で手を尽くしてやってみたんじゃ。家内は若者の髪を切り、わしはその頭の血を洗ってやったが、頭はナイフ

か石斧のどっちかで骨の部分まで斬りつけられておった。脳みそまで達しておらんかったのは神様のお恵みのお陰じゃった。なにしろ耳のすぐ上の辺りをしっかり狙った一撃じゃったからのう。服を開いてみると、片方の脇腹にも傷が見つかった。これはナイフの仕業でな、かなりの深手を負っておるようじゃった。出血もひどいんじゃ。服という服が血でこわばっておった。治療のことはたいしてわからなかったんじゃが、小屋にはラム酒が少しあったから、それで傷を綺麗に洗って若者の喉に少し流し込んでやると、若者は前よりは楽な感じでうめき声を上げたんじゃ。それでわしらは正常な意識が戻ってきているのがわかったんじゃ。暖かい布で体をこすってやり、暫くして若者が意識を回復した様子を見せたのを見て、飲めるだけの水をやった。これが体に効いたようじゃ。わしらにできることは皆やってから、暖かくくるんで暖炉の前に寝かせ、わしはその横に大の字に寝ころんだんじゃ。若者の傷が良くなっていった状況をひとつひとつ話すと長話になってしまうじゃろうから、あんとき死なずにすんだと言うだけで十分じゃ。最初やったことと同じことぐらいしかやってやれんかった。それでも間もなく歩けるようになったんじゃ。あの若者はいい奴じゃった。最初、初めて意識が戻ったときはひどく恥ずかしがって、わしらの顔をまともに見ようとはせんかったし、小屋から出ていくことができたら、すぐによろよろ歩いてでもそうしたはずじゃ。しかし体は弱っているからそれもできんというわけで、そうこうしているうちにわしらの好意がわかると気持ちも和らいでいったんじゃ。少しずつ少しずつ、この若者はまだ六歳にもなっていなかったわしの愛娘のルーシーと遊ぶようになってな、暫くすると、二人して遊んでいるときが一番うれしそうじゃった。娘も、最初は怖がったんじゃが、その後はこの若者になついてな、自分と同じ純血の白人であるかのように一緒に遊びたがったものじゃった。最初から若者は英語を二言三言話せたんじゃが、物覚えは速か

った。インディアンにしてはかなりうち解けた話仕方をしたんじゃが、しかしそれでもどうして傷を負ったのか、誰にやられたのかということについてはどうしても話そうとはせんのじゃ。その話を持ち出すと、その表情は暗くなり、話すぐらいなら戦った方がましだといった感じで口は固く閉ざされたままじゃった。とにかく、わしにはせかしてしゃべらせるつもりはなかった。真実のしっぽをあんまり激しく引っ張るということをしなければ、そのしっぽを掴んでしまえばいつかは必ず真実の頭が姿を現すことは間違いないとわしは確信しておった。

5

「若者は六週間ほどわしらの家にいて、日増しに体はよくなっていったんじゃが、傷の回復はゆっくりしておったから、六週目の終わりの頃になっても防御柵におさらばすることなどとても無理じゃった。そうこうしているうちにインディアンとの揉め事が増えていった。それまでわしらの地域では流血事件は全くなかったんじゃが、至る所で殺人や頭皮狩りのことを耳にするようになって、当然わしらにもやがてその運命が回ってくると思っておった。わしらは備えをし、杭を直し、弾薬を蓄え、夜は輪番制で敵の行動を見張った。インディアンの姿は全く見えなかったんじゃが、とうとう連中の気配がわしらの辺りで濃くなり始めた。連中が後にした野営のひとつをジェイク・ランサムが偶然見つけたんじゃ。昔のように部族のはぐれ者が姿を見せることはなくなり、夜の間だけ、でなければ藪の中を慎重にこそこそと歩き回って小屋をあさって周り、場所を次々と移動しているんじゃ、わしらがいろんなことに危険を感じても当然の

ことじゃった。こんなことがあったある夕方のことじゃった、わしはクリンチを連れていつものように見回りに出かけたんじゃが、門を出て暫くすると、犬は足を止め、低い声で吠えるんじゃ。何か良からぬことが起ころうとしていることを悟ったわしは、怯えた素振りは全く見せずに静かに身を翻すと、無事に家に戻ることができたんじゃが、そりゃ間一髪のことじゃった。わしが門をしっかり閉めたそのときじゃ、連中はわしの後を追って門までやってきてな、わしに不意打ちを食わせるのに失敗したことがわかって怒り狂っておるようじゃった。今はこの世にいないクリンチの鋭い嗅覚がなかったなら、どんなにわしの偵察の技が巧かろうと、いや、若い頃もわしの腕はちっぽけなものじゃなかったんじゃが、とにかくお天道様が目を開けて連中の探しているものを見つける前に連中がわしをやっつけ、わしのものをすべて手に入れておったはずじゃ。待ち伏せに失敗したことがわかると、やつらはときの声を森中に響かせたが、それは連中が正攻法で攻めるつもりでおるという証じゃった。ときの声を聞いたインディアンの少年の目は輝き、猟犬が初めて鹿を嗅ぎつけたり猟師の角笛を聞いたときのようにその耳はぴんと立った。若者をじっくりと見つめながら、わしはどうすればいいかわからんかった。若者は敵陣営の一人かもしれん。わしが正面で戦っている間に家の中で家内や子供たちの喉を掻き切ってしまうかもしれんのじゃ。まだ話してはおらんかったが、若者を見つけた小さな湖の近くであいつの弓矢をわしは拾い上げたんじゃ。あいつを家まで運んだとき狩猟用のナイフはあいつのベルトについたままじゃった。弓矢とナイフをあいつから取り上げるべきかどうかが問題じゃった。これをやるとすれば棒切れ一本あれば事足りるはずじゃ。わしは若者をじっと見守りながらこのことを何度も考えた。危険なときには思考というものはそりゃ巡りに巡るもんじゃ。とにかくあらゆる面から考えに考えたわしは、あいつを信頼できる友のように信じる方がいいと

心に決めた。あれだけあいつのためにやってやったんじゃ、あいつが裏切るはずはないと考えたわしはあいつに『レナテーワ』と叫んだ。あいつは自分をそう呼んでいたんじゃ。『連中はお前の部族だろう』『そうだ』と若者はゆっくりと答え、君主のように背筋をしゃきっと伸ばすと—なにしろあいつは堂々とした若者でな、ミコ[6]の息子のような身のこなしをしておった、実際そうじゃったんだが—『そうだ、あいつらはレナテーワの者たちだ。レナテーワは出ていく必要があるか』と言い、外に出る素振りを見せた。しかしわしは止めた。捕虜のようなあいつがいるからわしらは安全でおれたんじゃ、だからわしはそれを失いたくはなかった。『いいや』とわしは言った、『いいや、レナテーワ、今夜は駄目だ。明日でいい。明日になったら連中にわしが味方で敵じゃないと伝えてくれ。そうすればわしのテント小屋に火をつけにやってきたりはせんだろう』『兄弟、味方』と若者は言い、あんまり遠慮もせんで近づいてきてわしの手を取った。それからわしの家内のところへ行き、同じことをやったんじゃ、家内が女だということを考えずに、『兄弟、味方』とな。わしはあいつをじっと見つめ、あいつの目と一挙手一投足を見つめ、それからベッツィにわしは言った、『この若者は嘘をついてはおらんから怖がらんでいい』しかしわしらは疲れ果てた一夜を過ごした。時々インディアンの叫び声が聞こえた。銃眼からは三つの火の明かりが違った方角に見えたから、開拓地の他の連中がわしらを助けに来れんようにしているのがわしらにはわかった。しかしわしは降参も絶望もせんかった。一晩中あれやこれややったんじゃ。レナテーワはわしを手伝うことは全くせんかったが、今の事態にやらねばならんことは何一つないかのような顔をして静かに座っておったし、暖炉の前に横になったりしておった。次の朝、辺りが明るくなり、あいつを見ると、あいつを最初見つけたとき身につけていたあの血塗れの服を身につけておった。わしがやったものは全部脱ぎ捨て、今身にま

とっている狩猟服と脚絆は血と埃だらけじゃったが、客に会いに行く準備をしているかのように身支度をしっかりと整えておった。名門のインディアンは白人にはない生まれつきの上品さと威厳というものがあるんじゃ。あいつは銃眼のひとつから外を覗くのに夢中でな、わしには何もわからんのじゃが、あいつが非常に興味深いものを目にしたことは明らかじゃった。わしがどんなに警戒しておっても、あいつが外の連中とある種のやり取りと連絡を巧くやっておったのがやがてわしにもわかった。あんときはこれはわしには謎じゃった。というのもわしは弓矢のことなど忘れておったからじゃ。あいつは自分の髪の房をしっかりと矢の端にゆわえた矢を銃眼から射たようじゃった。これの効果は大変なものでな、このお陰でそれから数時間はインディアンは一人も姿を見せなかった。その矢が放たれたのはちょうど夜明けの頃じゃった。ところでじゃ、連中が何をしておったのか、今のわしには推測することしかできんが、この推測ができたのも、今にも起ころうとしていることが全てわかった後のことじゃ。どうすればいいか相談していたのは明らかじゃった。その会議がわしらじゃなくて連中の中の何人かの喉を掻き切ることになるとはわしには知る由もなかった。しかし敵の姿がしっかりと見えたとき、二つの集団が森から現れた。実際には分かれておらんのじゃが、一緒に動いてもおらん。連中の間でなにかもめ事があったようじゃった。全部合わせると四十人はおるし、そのうちの八人か十人ばかりが一人の酋長を先頭に離れて歩いておった。この酋長はがっしりとした陰気な顔の男でな、顔の半分は真夜中のように黒く塗ってあって、両目の周りには赤い円が描いてあった。もう一方の一団は白髪の老人が率いておって、この男は六十より下ということはなかったはずじゃ。この年になって女や子供の頭皮を探し回っているとはたいした奴じゃ。わしが膝をついて銃眼から連中を見ておると、レナテーワがやって来て、わしの腕を触りながら老酋長を指さしてこう

言った、「ミコーレナテーワーグルッコ」これでわしは相手が若者の父か祖父であると推測できた。『そうか』できればやつらの信頼と友情を手に入れることが一番の策だとわかったわしは言った、『そうか、それなら、お父さんのところへ行ってダニエル・ネルソンがおまえのためにやってあげたことを伝えてくれ。戦いはなしと行こう。おまえもわかっていると思うが、わしらは戦える。武器も食糧もたくさんある。信じられんかもしれんが、王である君のお父さんと、もう一人の戦い化粧で悪魔の身ごしらえをしている奴をこのライフルでねらい撃ちすることもできる』『撃てばいい』若者はすぐに答え、わしが最後に言及した酋長を指さした。『そうか、あいつはおまえの敵なのだな？』若者は頷いて自分のこめかみの傷と脇腹の傷を指さした。わしはようやく事態の状況が飲み込めた。『いいや』とわしは答えた、『駄目だ、レナテーワ、わしは誰も撃つつもりはない。わしは平和を求めておる。インディアンの役に立つことをやりたいし、インディアンの友人になりたい。お父さんのところへ行ってそう言ってくれ。さあ行くんだ、そしてお父さんをわしらの味方につけるんだ』若者はわしの片手をつかまえるとそれを自分の頭のてっぺんに置いて、『わかった』と叫んだ。わしはそれからあいつに門のところまでついて行ったんじゃが、ところがあいつは小屋を出る前に立ち止まって、その手を幼いルーシーの頭に置いた。わしは嬉しかった。というのもそれはこう言っているように思えたからじゃ、『君を傷つけることは絶対ないからな。君の頭髪一本傷つけることも』わしはあいつを外に出すと、しっかり門を閉め、それから銃眼のところへと急いで戻っていったんじゃ。

6

「すると今度はそりゃおっそろしい光景が現れた。インディアンの連中が若い王子を見ると一斉に叫び声を上げたんじゃ。それが喜びの声か、一体何なのかわからんかった。若者の体はまだかなり弱っておったが、あいつは大胆不敵に前へ進んでいって、一団の先頭にいた王が前へ進み出てあいつを出迎えたんじゃ。若いレナテーワがわしに撃つように命じた黒い酋長が率いるもう一団の小さな一行もまた前に進み出たが、非常にゆっくりとしておってな、前に出るか立ち去るか迷っている風じゃった。この一団の首領はかなり狼狽した顔をしておった。しかし長く思案する時間は連中にはなかった。というのも、若い王子が父親と対面し、二言三言二人が言葉を交わすと、レナテーワの指が黒い酋長を指さすのが見えたんじゃ。すぐにあいつは固く握った拳を上に上げると、怒って話しているかのように体を揺すった。するといきなり王の一団からときの声が上がって、もう一方のインディアンの軍団は黒い酋長を先頭に逃げ始めた。しかし二十歩も行かぬうちに一ダースの矢が奴に降り注ぎ、奴は前につんのめり、地面をかきむしった。奴の一巻の終わりじゃった。黒い酋長の一団は四方にちりぢりになって逃げたんじゃが、王の一団は後を追うことはせんかった。すべての矢がこの一人の男に狙いを定めてあったらしくてな、奴がぶざまに倒れたときにすべてが終わりとなったんじゃ。すべてが五分もしない内に終わった。

7

「これはわしらには幸運な出来事じゃった。レナテーワはまもなく年老いたミコに無理矢理講和を承伏させた。実際若いミコの叔父でこれを殺す十分な動機を持っていた黒い酋長が若者が白人に殺害されたと

報告してきたから、老酋長は赤い棒[7]を手に取ることに同意しただけのことじゃった。この情報に老人はかんかんに怒りわしらのもとへ攻め寄せたんじゃ。真実がすべてわかり、わしらがどんなに息子に友人として対応したかがわかると、感謝に感謝を重ね、いろいろと約束してくれた。太陽が輝いている間、川が流れている間、そして山々が立っている間は、わしの味方だと誓ってくれたが、もしこの立派な老人がそれだけ長く生きることができたなら、酋長はその誓いを守っていたはずとわしは今でも信じておる。とにかく、老人が生きている間は誓いは守られたし、その息子のミコのグルッコが跡を継いだときも約束は守られた。年月が過ぎていき、インディアンと白人の間で何度も戦が交わされたが、それでもレナテーワはわしらの戸口には近づくことはなかった。あいつ自身幾度かわしらの人種と交戦することはあったが、決してわしらの開拓地と戦うことはなかった。あいつは自分のトーテムをわしらの周りの木立に置いていったから、インディアンはここが神聖であることがわかったんじゃ。しかし、十一年間も経つと、ひとつの変化が現れた。若い王子はわしらの友情を忘れてしまったかのようじゃった。もうあいつの姿をわしらのところで見ることはなかったし、そして不運なことじゃが、わしらの村の何人かの若者が、わしらの開拓地の若者たちがじゃ、リッパリー族[8]の若い三人の戦士がわしらから盗んだ馬に乗っているところを見つけて三人を殺害したんじゃ。それを聞いたときはわしは残念でな、この新しい事態がもたらす結果を恐れ始めたんだが、それは思いもしなかったときにわしらを襲ったんじゃ。レナテーワがわしの小さな家族に攻撃をかけることはないと信じる十分な理由はあったんじゃが、あいつが一部族の王子であって部族連合の王子ではないことをわしは忘れておった。今度のは国を挙げての戦い[9]じゃ、チェロキー族全体が武器を取って立ち上がっておった。今でも生きておる多くの連中があの恐ろしい戦争のことは覚えておるし、

カロライナ人たちがついにインディアンの鼻を折ってやった経緯も覚えておる。じゃが、あの戦争でどんなに多くの血が流されたか、どんなに多くの頭皮が剥がされ、老若男女、子供たちがどんなに悲惨な目に遭ったかを口にすることはできん。わしらの開拓地はかなり大きくなって点在しておったから、食糧を蓄えることができ、必要なときはいつでも逃げ込むことのできる相当大きなブロックハウス[10]を作らねばならんかった。インディアンの足跡が見つかったという斥候の知らせを耳にするとすぐにそこへ引っ越し、そこでは婦女子は厳重な監視下に置かれたんじゃ。昼間は農場の番をし夜だけ家族のもとへ戻った。五週間ばかりわしらは家族を動きの取れないこのような状況に置いていたんじゃが、攻撃はなかった。インディアンの気配は消え、わしらは皆嵐は吹き止んだものと思ってな、レナテーワの昔の友情がわしらを救ってくれたのだと希望を託し、そう思い込んだんじゃ。そんな風に考えてわしらは前ほど警戒しなくなっていった。男たちは一晩中農場にとどまり、ときには昼間女たちを一緒に連れて歩くことも、またときには子供たちを連れて歩く者さえあった。わしはこれに反対して注意したんじゃが、皆わしをからかうだけでな、年取って怖がっているだけだと言うんじゃ。わしはそいつらに『誰がいの一番に怖がるか今にわかるさ』と言ってやった。しかし、白状すると、どんなにわしが偵察しても一人もインディアンを見かけることもなかったから、わしは他の連中と同じ感じや考えを持ち始め、無頓着になり始めておった。時々ベッツィを農場へ連れていくことにも反対せんかった。守ってくれる男をつけずに家内が何度かルーシーと一緒に農場に出かけたこともあったが、家内はわしに隠しておった。それでもブロックハウスから一マイル半足らずの距離じゃ、インディアンの噂は聞いておらんし、あんまり向こう見ずなことには思えんかった。ある日のことじゃ、雑木林に大きな熊が何頭かおるという話をきいてな、開拓地から四マイルほど離れた

熊の生息地として有名なところでじゃ。そこでわしらは、サイモン・ロリス、ヒュー・ダーリング、ジェイク・ランソム、ウィリアム・ハークレスとわしじゃが、犬を連れて狩猟に出かけたんじゃ。急襲して熊を狩り出し、そりゃ大きな熊を、それまで見たこともないような熊を狙ってわしは最初の一発を見舞ってやった。その動物の足を少しだけ不自由にしてやってから、わしは追いかけて雑木林に駆け込んで行った。他の連中は他の熊を追って他の方角へ突進し、わしは自分の力で自分の仕事を片づけざるをえんかった。

「わしはクラップとクローの二匹の犬を連れておったが、まだ子供でな、熊を相手に互角の闘いをするときにはあまり力にはならんかった。クリンチのやつは死んでもうこの世にはおらんかったが、あいつなら害獣相手に違った当て推量もできたはずじゃ。じゃが熊を追うことに懸命になっておったわしは、この野獣と真っ向から取っ組み合いをするまで二匹の犬の才能については考えもせんかった。皆さん、わしは法螺吹きはせんが、あれこそ格闘じゃった。本当にわしは息が全くできんかった、なにしろあの熊はわしの体の細い部分の辺りを捕まえておった。体をへし折られたわしは、これ以上相手の手を煩わすこともないような状態でな、ねじ伏せられておった。しかしわしの心はベッツィと子供達のことを考えると強くなり、腕は肘から上は使えんかったが、わしはナイフでその動物のやつの皮を鋭く突き刺して引き裂き、肋骨のところへ突き刺してやった。すると熊は尚更しっかりとわしを締め付けるんじゃ。わしより先にあいつが息切れしていなければわしはおだぶつじゃったと思う。わしはそいつの腰にかなり深い窓を作ってやって、それで命の源が大量に外へ飛び散ったんじゃ。そいつの鼻はわしの胸に倒れかかってきて、それからそいつの手が倒れかかってきた。張りつめた緊張がなくなると、わしは子供の病人のように倒れ、そいつはわしの上に倒れた。しかし熊はそれ以上危害を加える気はなかった。もう一度か二度手でわしに暴力

を加えたが、それは最後の抵抗をしているだけのことじゃった。死んだ熊と並んで、そこにわしは半時間ばかり横になっておった。わしはそいつと同じくらいに動けない状態で、ちょうど薬を飲んだ後のようにもどしてしまった。意識が戻ってきてわしが立ち上がったとき、仲間の猟師たちが立てる物音は聞こえんかった。そこにわしは二匹の犬と熊と一緒に取り残されて、太陽はずっと前に子午線を過ぎておった。雑木林の外に繋いでいたわしの馬は、手綱は外してあったから、その場からあてもなく離れて草を食んでいるか、ブロックハウスに直行したかのどっちかじゃった。これらのことを考えるとわしの気持ちはあまり晴れんかった。わしの腹は本調子じゃないし、肋骨も頑丈な作業服に包まれて汗だくだくになって働いてきたかのように痛みを感じておったが、そこに立ってぶつぶつ不平を言っても無駄だしそんな余裕もなかった。わしはどうにか熊の皮を剥いで肉を切り裂くと、立派な山ほどの脂身を取り出した。毛皮を掴んで、肉に樹皮をかぶせると、犬にたらふく食べさせてから口笛を吹いて犬を熊から引き離し、馬の方に向かった。しばらく馬の跡を辿っていったが、最後にはかなり疲れ果ててしもうた。馬は怯えて全速力で走り去ってしまい、家に戻らずに雑木林の山腹を駆け下り、それから脇へそれて幾つかの丘を回り道し、恐らく七マイル以上も離れてしまっておったはずじゃ。これを知ったわしはその日歩いて馬を見つけ出すのは無駄だと思ってな、引き返してブロックハウスにできるだけ速く戻るしかなかった。しかしこれは相当大変なことじゃった。この頃には太陽はかなり低い位置にあって、どんなに頑張ってもわしの前には七マイルはたっぷりあったんじゃ。しかしわしは熊の吐き気から立ち直りつつあったから、両脚は疲れ切っておったんじゃが、腹は前よりよくなっていたし、心も前より勇ましくなっておった。それに、一晩まるまるかかることじゃろうし、夜でも昼間と変わらず道はわかっておるわしは全く急いでもおらんかったから、結

局わしの気持ちはかなり元気になっていったんじゃ。ゆっくりと前に進みながら、時々立ち止まっては休み、そうやっては体力を取り戻したんじゃ。上着のポケットに煎ったトウモロコシの粉と砂糖を少しばかり持っておったからそれを食べたんじゃが、それにだいぶ助けられた。その日の晩餐はそれだけじゃった。夕方になるとひどく静かになった。ジェイク・ランサムや他の連中の姿も見えなかったし声も聞こえなかったからおかしいとは思ったんじゃが、猟師が皆よくやるように連中もどこまでも獲物を追って行ったはずじゃと考えて、皆のことはちっとも心配せんかった。しかし連中のことを考えていたちょうどそのときじゃ、銃の音が聞こえ、それからまた聞こえ、その後再び静まり返った。わしは自分のライフルの準備をし、ナイフを手探りで捜すと前より少し足早に進んでいった。この後真っ暗闇がやって来るまで一時間は歩いたと思うが、それでもブロックハウスまではまだ四マイルはゆうにあった。その晩は曇っておって、星ひとつなく、空気はしめっぽくて物憂い感じじゃった。無事に家に帰ることができるといいんじゃがと思うようになってきて、少し変な気分、熊がわしをひっ抱えておったときとほとんど同じ気持ち悪さが戻ってきた。じゃがそれは体の気持ち悪さというより心の気持ち悪さじゃった。何かおかしいと思ったんじゃ。こんな感じが一番強くなってきたそのときじゃ、わしはひとりの人間に躓いたんじゃ。手探りで相手の頭に手を置いて、そいつの頭皮がないということがわかったときは、わしは血が凍るような思いじゃった。それでわしは厄介なことが起きたことを知ったんじゃ。わしの足元にいるのが誰かわからんかったが、それでも猟師仲間の一人じゃと思った。とにかく前へ突き進むことしかわしにできることはなかった。疲れのことなど吹っ飛んでしまっておった。わしは戦うつもりでおった。ブロックハウスにいる家内と子供のことを考え、家族がどうなるか考えると、わしは狼のようになった。わしがあのとき何をやろうと考え

ていたかは神さまだけがご存じのはずじゃ。この事件で何をすればいいか、本当に気の利いた考えを持っていたとは言えん。インディアンの連中がもうブロックハウスを襲ったのかどうかはどうしても考えることはできんかった。ただ、女や子供たちが農場に戻ったりするのを止めなかったのを思い出すと、不吉な思いがわしの脳裏をかすめた。わしの興奮と悪寒は最高潮に達しておった。興奮の熱で焦げそうになるかと思えば、次の瞬間には凍えそうで震えてしまったが、それでもわしは突き進んだ。わしの手足は鋼鉄でできておるようでな、今となっては疲れは全く感じんかった。このときわしは十一年前に錯覚だと後で判明した、あの奇妙な野営地の火を最初見た小高い長い山脈のところまで来ておったが、ちょうどそのときわしの脳裏にそのことがまざまざと蘇ってきたのも当然じゃった。あの不思議な事件をよく考え、以前何度もよくやったように、あれは一体どんな意味を持っていたのか自問していたわしは、昼間であれば大体十マイル以上もこの辺りの四方を見渡せる丘の頂上にたどり着いておった。その場所で、わしが例の幻の野営地を見た向かい側のちょうどその同じ丘の上に、わしの目に別の野営地が飛び込んできて、それが今回は本物の野営地とわかったときのわしの驚きはどんなものか、皆さんにはわかるまいて。燃え立つ火があって、わしが以前見た向かい側より手前の方が木立も下生えも茂っておったけれども、何人かの人間の姿が見えた。インディアンじゃった。目の前の敵がすぐに見えたわしは、今度は何をしたらいいかよくわかった。わしは野営地を見張り、赤い悪魔たちが何をやろうと考えているのか、また既に何をやったのか調べるつもりじゃった。以前同じような探索をやったときのわしと比べれば今のわしの方が斥候としても猟師としても腕前は一枚上手じゃし、連中の間にごたごたを起こさずに、今起きようとしていることがすべて見えるだけの距離まで近づくことができた。だが二匹の犬は後に残しておく必要があった。吠えると

困るから繋いでおくことはできん。そこでわしは猟師の服を脱いでそれを地面に置いて一匹に守らせ、もう一匹にはわしの帽子と角笛をやった。犬たちがそれをほっとくことはないことはわかっていた。なにしろわしは犬にそれを教え込んでいたんじゃ、つまり取りに行って持ってくるだけでなく見守るということをな。それからわしは短い祈りのようなものをつぶやくと追跡に取り掛かった。ゆっくりと前進しなければならなかった。あの最初の野営地での対応でやったように今回振る舞えば、きっとわしは頭皮を剥ぎ取られてしまっていたはずじゃ。とにかく、長い話をかいつまんで言えば、わしは相手を騒がせたり驚かしたりもせずにわしが見たいものがすべて、それにそれよりももっと多くのことが見えるところまで近づいていったんじゃ。さてと、十一年前にわしが見た幻に終わった野営地の光景の意味がわしにはこのとき初めてわかったんじゃ。あの最初の光景がわしの前に再び現れたんじゃ。火の回りにインディアンたちがおって、その真ん中に若い女がひとりいて、その若い女はわしの娘、わしの子供、あの可哀想な愛しいルーシーだったんじゃ。

8

「とても父親に耐えられる光景じゃなかった。あんときの気持ちは言葉にできんし、そうするつもりもない。しかし、わしは四つん這いになったままそこにおって、まるで目で見ることで石になったかのような感じじゃった。たっぷり三十分は手足の一本も動かさずにじっとしておった。時々わしの目から絞るようにして出てくる大粒の涙を見れば、また、トウの茂みが茂みの中の池が突然波立って震えるのを時々見

ることがあると思うんじゃが、そんな感じでわしの体を揺さぶるわしの身震いを見れば、わしが生きておることがわかったはずじゃ。わしは神に助けを求めようとしたんじゃが、祈ることはできんし、思案するといっても、これも同じでできなかった。わしは見るだけで何もできんかったが、といっても、何の助けもなく、わし一人で、一丁のライフルしかなくナイフしかない状態で立っておるわしには、動くことでたいしたこともできないこともはっきりしておった。ライフルを持ち上げて一団の一番のやつを一瞬のうちに倒すことはできたじゃろうが、それが何の役に立つのか。わしは血を流すのは決して好きじゃなかったし、娘を確実に取り戻すことができれば、あの赤い悪魔野郎たちに永遠に生きる許可を与えてもよいと思ったんじゃ。どうすればいいのか。ブロックハウスへ戻るべきか。しかし、皆閉じ込められたまま襲われているかもしれん。それならば他に助けを求めるところがどこにあるのか。どこにも、どこにもない、神様を除いては。わしはうめき声を上げた。大きなうめき声じゃったから、連中に聞こえるかもしれんと心配じゃった。しかし連中は夕食を食べたりして皆忙しかった。可哀想にルーシーはその真っ只中にいて、食べもせず、とても青ざめて、とても惨めな顔をしておった。あれがほんの子供のころ、十一年前、あれは兆候にすぎなかったんじゃが、あのときと同じ苦境に娘はあったんじゃ。とにかく最後にわしはわき道にそれた。どうしていいかわからず、わしは惨めな思いのために見ておれず、丘の麓まで下りて行き、それが何か役に立つかのように頭の髪をかきむしりながらうめき声を上げながら地面の上で転げ回った。そこがどこなのかわからないまま、わしの肩に手をかけた者がある。わしは飛び上がると、ライフルを頭の上にふりかざし、闖入者に台尻で殴りかかろうとしたが、相手の声にわしの手は止まった。

『兄弟』と相手は言った、『俺、レナテーワ』

「相手の話し方、その柔らかな口調にわしはその若い王子が味方しようとしてくれているのがわかったから、わしはあいつに手を差し出した。しかしそうしながらわしの目からは涙がほとばしり出て、わしは心の底から感動した人間のように、丘の方を指さし、『わしの子が、わしの子供が』と叫んだ。

『気しっかり持つ』とあいつはわしを力ずくでその場から引き離しながら言ったんじゃ、『来る』

『しかし、レナテーワ、お前娘を助けてくれるのか』

「あいつはすぐには答えず、わしを小さな湖まで連れていき、何年も前にあいつの死にかかった身体をわしが運び出してやった老木を指さしたんじゃ。これでようやくわしはあいつが言いたいことがわかった。あいつは昔わしがやってやったことを忘れておらんかったんじゃ。あいつはわしのためにあらん限りのことはやるつもりでおったんじゃ。だがわしはそれだけでは納得できんかった。どうやって、いつそれをやるつもりなのか、どれだけ希望が持てるのか是非とも教えてもらわんと困るんじゃ。というのも、あいつが用心してわしを野営地から引き離したところから、あいつがあの一団の指揮を取っているのではなく、連中に何の力も持たないことがわかったからじゃ。それからあいつはわしに、野営地で戦士たちの戦争化粧が見えたかと尋ねた。しかしわしは子供の窮地以外は何も見てはおらんかった。それからあいつはわしに戦争化粧のことを詳しく説明したが、それは丘の上の一団があいつの不倶戴天の敵であることをあいつなりに教えるためじゃった。連中の目の周りの化粧は何年も前にあいつを殺そうとし、わしの見ている前であいつの父親の一団に撃ち殺されたあいつの叔父の大酋長のそれじゃった。丘の上の一団を今指揮している若い酋長はその叔父の息子でな、父の死のかたきとしてレナテーワに復讐することを堅く誓ったんじゃ。こんなことをあいつは数分でわしにわからせた。それからあいつはわしの子供を救い出すには巧妙な

手口を使うしかないことをわしに教えた。あいつには二人の部下しかおらんかったが、その二人はそうこうしているうちにせわしく準備に取り掛かっておった。だがあいつはこの準備についてわしに説明しようともせんし、説明することもできんかった。わしは持てる限りの忍耐力であいつのすぐ後について進んでいった。というのも、インディアンというやつは戦っているときはすばしっこさではほとんど誰にも負けないんじゃが、そのときを除けば一番冷静でゆっくりと動く人間なんじゃ。暫くするとレナテーワはわしを丘をぐるっと回るようにして連れていった。随分と歩いたが、行き着いた先がどこなのかわからんうちに、あいつはわしが見たこともない窪地にわしを連れていった。驚いたんじゃが、そこには十二頭か十四頭もの馬が繋がれておった。それはこの赤い悪魔たちがその日に開拓地から盗んだものでな、わしの馬もその中の一頭じゃった。若い王子がわしに言うまでわしにはそれがわからんかった。

『あれ、すぐ動く』じっと見てわしの馬だとわかった外側の一頭を指さすとあいつは言った、『あれ、すぐ動く』それでわしはこの言葉であいつの計画がわかったんじゃ。だがあいつはこの計画にわしが加わるのを許さんかった、少なくともその時点ではそうじゃった。わしらが立っておった窪地とインディアンたちが野営していた丘はかなり離れておったが、窪地は丘の麓にあったから、あいつはわしに頭上の火を見張っているようにわしに命令すると、影のように密かに静かに前に進んでいった。それまで自分をたいした斥候と思っておったわしも、あいつの手助けをする資格はないとそのときわかったくらいじゃ。少ししてあいつは繋いであったわしの馬を解き放すと、音も立てずに窪地の向こうへ引っ張って行き、丘を半周するとそれから向かいの丘を登っていった。ほとんど物音は聞こえず、風は野営地の方角から吹いておったが、敵が警戒を始めた様子は全くなかった。じゃが、あれほど恐いと思ったことはわしの人生で初め

てじゃった。わしはレナテーワについていき、わしの馬をあいつが繋いだところを見つけた。あいつはブロックハウスに向かう途中で、わしの馬をインディアンたちから数百ヤード離れたところに置いた。窪地が湾曲しているために、わしらが今立っているところからすると、インディアンの野営地はわしらと連中が盗んだ馬を繋いでおったところの間に位置しておった。このことに気づいたわしはあいつの計画が少し推測できた。そうこうするうちに、あいつの二人の部下は次々とやって来て、彼らの言葉であいつに長い報告をした。これが終わると、あいつはわしに、わしの猟の連れの三人は頭皮を剥がされ、もう一人のヒュー・ダーリングは二度撃たれたけれども逃げ切って、ブロックハウスに警報を発したこと、わしの娘が連れもなしに一人で向かった農場で捕虜となったことを話してくれた。これでわしは前より少し心配はなくなっていったが、レナテーワは次に何をするつもりでいるか話した。勿論わしもそのためにやらねばならないことがあった。あいつは二人の部下を連れて立ち去り、わしは一人で行動することになった。三人が丘の反対側まで十分進んだ頃合いを見計らって、わしはレナテーワに負けず劣らず本当に精一杯の忍び足で野営地の方に向かっていった。二十メートルほどやって来たときだったと思うんじゃが、わしは密かに隠れて待った方がいいと思ったんじゃ。ごたごた集まった連中の頭が一つ一つわしの目に入り、わしの可哀想な子供はその中で連中の醜い戦い化粧した肌の側でそりゃ青ざめた顔をしておった。さてと、暫く待っていると、丘の反対側の窪地に繋いであった盗まれた馬たちの、今まで耳にしたことがないような騒々しい音、馬が踏み荒らす音、いななく声、甲高い声が聞こえてきた。ここで是非とも言っておかなくてはならんが、インディアンにとって盗んだ馬はちょうど恋人が白人男性に大事なのと同じぐらいに大事なんじゃ。だから、騒動が野営地に届くと、連中は皆自分の動物を逃がすまいと駆け出した。一人を除く

と赤い肌の連中は皆馬の方角へ姿を消したが、その一人は他の連中と同じくさっと立ち上がったんじゃが、その場から動かなかった。そいつはトマホークを持って可哀想なわしのルーシーの上に立ち、今にも一撃を加えんとするかのようにそれを娘の頭上で振り回した。娘は、可哀想なわしの子供は、たき火の片方に座っておったからそれと同じくらいはっきりと見えたんじゃが、両手をしっかりと握りしめておった。祈りを捧げておったんじゃ、今にも頭を殴られると思ったに違いないからな。わしは、とても感情を抑えることはできんかった、本当じゃ。わしは腸が煮えくり返るような気持ちじゃった。赤い悪魔野郎が血なまぐさい武器を時々わしの子供の耳のすぐ近くで振り回すのを見たとき、ますますその思いは強くなった。だが感情を抑えることはどうしてもやらねばならんことじゃった。物音がかなり静まるまで、連中が丘の向こう側へ随分駆け出して行ってしまうまでは、丘のこっち側で連中を驚かしてはならんのじゃ。必要なだけ十分に待ったとははっきり言えんけれども、感情に負けない間はわしは待った。それからわしは子供を見張っているインディアンの胸に照準をできるだけ定めるようにしてライフルを下げた。わしは狙いをつけたが、少し身震いしているのがわかってやめた。銃弾は一発しかない。この一発のもとに相手を射殺さなければ可哀想なルーシーには大変な一発になることはわかっておった。娘に当てるのが恐かったわけじゃない。インディアンに命中できる自信はかなりあった。しかし銃弾が必中しなければ無駄に終わるんじゃ。というのも、敵を傷つけただけでは、敵は残された力を振り絞って娘の頭にトマホークを打ち込むことはわかっておった。わしは再び取り掛かる気になったが、今度は怖じ気づいたりはせんかった。遠くの方で人間や馬のどよめく音が少し聞こえたばかりじゃった。今を逃すとだめだ。銃口の片面を一本の木に立てかけて、敵に銃弾を精一杯見舞ってやった。立ち止まったままどれだけ巧く行ったか確かめること

もせず、ナイフで最後の仕上げをするために叫び声みたいなものを上げながら飛び込んでいった。しかしことは既に終わっておった。獣は仰向けに倒れておって、わしは子供を後ろの若木に結びつけていた蔦をナイフを使って切るだけでよかったんじゃ。果敢な少女は叫び声も上げず気を失ったりもせんかった。ただ、『ああ、お父様』と口にしただけで、わしも『おお、お前』という言葉が口に出ただけじゃった。それからしっかりとわしらは抱き合った。しかしそれもつかの間のことじゃった。抱き合って時間を無駄にすることはできん。すぐにわしが馬を残してきたところへわしらは急いだ。あの可愛い老いぼれ馬の四本の足が役に立ったことがあったすれば、それはあの晩じゃった。ブロックハウスに転がり込んだとき可哀想なベッツィの喜びに満ちた驚きようはなかった。家内はわしと娘が頭に生まれたまんまの頭皮をつけた姿を見ることは二度とあるまいとはっきり他の者に話しておったようじゃ。

9

「わしら白人と赤い肌の連中との間の今回の戦争の一部始終を語って聞かせる必要はない。わしらに起こったこととわしらが関係したことを語るだけで十分じゃ。その大事件と戦闘や焼き討ちの事件については印刷された書物や新聞で好きなだけ見つけることができるじゃろう。わしが話していることは本には書かれてはおらんが、それでもどの本に負けることのない真実の話じゃ。わしらが関係した事件の最悪のことは今話した通りじゃ。若い酋長のオロショティー（それがあいつの名前じゃった）、つまりレナテーワの従兄弟で敵の酋長が他のインディアンを率いてわしらの開拓地を急襲することになっておったんじゃ。

やつはやれると思いやるつもりでいたことを全部やったわけじゃないが、実際わしらの被害はかなりのもんじゃった。間髪を入れずわしらの農場に残らず火をつけてわしらをブロックハウスの外へ誘い出そうとしたが、これが巧く行かないことがわかると、わしらのもとから去っていった。とにかく、インディアンというものは酔っぱらうためのラム酒や連中が飲める人間の血がない長い包囲攻撃となると、すぐに飽きるもんなんじゃ。そいつの部隊はブロックハウスの中にいるわしらを苦しめるには余りに小さかったし、それで奴は部下の戦士を撤退させたんじゃが、平和が戻るまでそいつの姿は二度と目にすることはなかった。治安が回復したのはミドルトン将軍がエコティーで部族連合を打ち負かした直後のこと[11]だったが、あの敗北はわしが死んでからも連中は長く覚えておることじゃろうて。この事件でレナテーワは喉に危険な銃弾を受けたんじゃが、もしそのとき部下の一人がそこに居合わせなかったら銃剣を胸に受けていたかもしれんかった。部下はあいつを連れて危機一髪のところを丘を転げるようにして逃走し、低地地方からやって来た騎兵の一部隊に追われた。インディアンは白人より治療法において熟練しているが、それでもあいつの傷が快方に向かったのは平和が戻って暫く経ってからのことじゃった。この頃にはわしらは皆農場に戻り植え付けをし家を再建して、苦難のことは忘れかけておった。ある日のことじゃ、わしらの丸太小屋にひょいと姿を見せたのが誰かというと、それはレナテーワじゃ。あいつの傷はすっかりよくなっておった。そりゃびっくりするほどの男前ぶりで、上背はあり美男子でな、一張羅をきておった。わしらと同じようなズボンをはいていて、狩猟服はほんとに素敵な青服で白い房縁飾りがついておった。化粧はしておらず、身だしなみは随分こざっぱりとしたものじゃった。級友のようにわしらはあいつを迎え入れ、あいつは三日間わしらの家に滞在した。それからあいつは帰り、二週間ほど姿を見せなかったが、また戻

ってきてまた三日わしらのところに泊まった。こうしてあいつは不規則にやって来てはわしらを訪ねたが、ある日ベッツィがわしに『ダニエル、あのインディアンのレナテーワがここへやって来るのはルーシーが目当てなのよ。こういうことは女性しかわからないわ』と言ったんじゃ。こう言われてみると、若い王子が随分ルーシーに目を配っていて、娘の後について庭に行き、わしらのことはほっぽりだして娘と散歩しておったことをわしも思い出した。しかし一方でわしはまた考えた、『わしの娘にあいつが好意を見せたからどうしたというんじゃ。あいつは立派な奴だ。ほんとに気高い心を持ったインディアンで、酒も飲まず、わしの考えではこの地方のどの白人にも負けぬくらいに立派な奴だ』しかしベッツィはわしのこの考えを聞き入れようとはせんかった。『私の頭が冷たくならないうちは野蛮人で異教徒で赤い肌の人間と娘を結婚させるなんてことはさせないからね』実際、あいつの頭は熱くなっておったから、わしに何ができるんじゃ。わしが口に出せたのはただこれだけじゃった、『ベッツィ、拍車をつけるまでは蹴ってはなんねえぞ。あの若い酋長が申し込みをして答えを出すまで十分な時間はあるからな。わしらがあいつに世話になったことを考えれば、ひどい扱いをするわけにもいかんだろう』ところが家内はそれはお門違いだという意見でな、わしらじゃなくあいつの方が恩義があると言うんじゃ。それでわしにできたことと言えば、若者がやって来たときはいつでも家内に苦虫を潰したような顔をさせぬことを止められぬことぐらいじゃった。じゃがあいつはわしが丁重に親切に応対したから家内のことはあまり気にとめている風じゃなかった。ルーシーも、母親にあいつには気を付けるよう言われておったが、わしの言いつけ通りにいつもあいつを丁重にもてなした。ただ、それは自然にそうしたんじゃ、なにしろ娘はあの恐ろしい夜のことをそう簡単には忘れることはできなかったからな。インディアンのトマホークを頭上にかざされて何が起こる

かもわからず、敵の野営地で捕虜となっていたあの晩、このレナテーワの巧妙な策と勇気のお陰で命が助かったと言ってもよいからじゃ。娘はあいつに優しく接し、わしは娘がそうするのを嫌とは思わんかった。娘は兄妹のようにあいつと散歩し、語り合ったが、あいつはちょうど生粋のフランス人のように娘に対して礼儀正しかった。

「確かに家内には二人が散歩に出かけていく姿を見るのは決して気持ちのよいものじゃなかった。『ダニエル・ネルソン』と家内は言った、『あの二人から目を離すんじゃないよ。何が起きるか知れたものじゃない。ルーシーがあの赤い肌のあいつが好きだということは確かだわ。万が一二人が駆け落ちでもしたら』『ええい、馬鹿なことを』とわしは答えたが、それでも家内は納得しなくてな、それでわしは若い二人をしっかりと見張れと言う家内の言葉に従ったんじゃ。お察しの通り、あんまり好きな仕事じゃなかったが、わしは無骨な男じゃし、女というもんがどんな生き物かあまりわからなかったからじゃ。わしはそういった事柄の判断は家内に任せ、わしは言われるがままに家内に従ったんじゃ。二人が散策に出かけるときはいつもわしはライフルを持って二人の後について行った。しかしそれはベッツィを安心させるためのものでしかなかったんじゃ。というのも、あの若者が娘と駆け落ちするのをわしが見たとしても、わしは絶対に若者に引き金を引くような人間じゃないと誓ってもいい。前にも言ったように、レナテーワは娘には最高の夫じゃった。しかし、可哀想な奴じゃ、事はそんな風には終わらなかった。あいつがわしらのところに滞在して一週間ほどたったある日のことじゃ、あいつがやさしくルーシーに話しかけると、娘は立ち上がり、ボネットを手に取るとあいつと一緒に出かけた。二人が家を出たときわしは見てはおらんかった。わしはたまたま上の階におった。生活するところじゃなく、インディアンが周りをうろつくとき避

難と防御のためによく使ったところじゃ。『ダニエル』と言った家内の素早い鋭い言葉に、わしは家内が何を言いたいのかわかった。しかしそのときは忙しく、おまけに家内がわしに行けと言いつけた仕事は完全には好きになれなかったんじゃ。ほんとの戦闘で敵を忍び足で追うのは本当に嫌なことじゃが、味方だと思っている人間の後を忍び足で追うのは正々堂々とした戦いで逃げることよりも後味が悪く、いつも恥ずかしい思いをするだけじゃ。それに、わしはレナテーワが何かしでかすとは心配してはおらんかったし、娘のことも心配はせんかった。確かに娘はあいつに優しく思いやりをもって接しておったが、それは娘の生まれ持った優しい気質のためであって、あいつが娘とわしらにどれだけ力になったかを心から知っていたからじゃった。だから、わしは二人の後をつけて行くのをやめて銃眼から二人を見守ることにした。さてと、二人が進んでいく。木々の中を歩いていくが、杭から遠く離れることはなく、一度として姿が見えなくなることはなかった。二人を見ながらわしは心の中でこう思ったんじゃ、『あの二人は見事な夫婦になるかもしれん』二人とも背は高いし、格好がよかった。ルーシーはというと、わしの開拓地のどの娘と比べてもスタイルがよく、その顔はスタイルとよく釣り合っておった。あのときは娘の動きはとてものんびりしていて上品で、どう見ても、他ならぬ今娘がやっていることをやるためにだけ生まれてきたかのように、歩いたり、座ったり、踊るように舞ったりしていた。レナテーワの方は千人に一人の若者じゃった。ところでじゃ、森の中を颯爽と歩いている若いインディアンの戦士は、酒を飲まぬときは神が創造した中で一番気高く見える人間と言っていいじゃろう。背筋をぴんと伸ばし、誇りも高く、堂々として、いつも偉大な行動をしているかのような感じ、全世界が自分を見つめているかのような感じを与えるんじゃ。レナテーワはわしがそれまで見た中で本当に一番ハンサムで高貴なインディアンじゃったし、そのときはほ

んとに随分高貴な人物だと思っておった。二人が少しうつむき加減に、特にルーシーがかなり頭を下にして一緒に歩いていくとき、ちょうどそのときあいつが娘に自分の想いについて話しているのだという思いがわしの頭を急によぎった。わしは心の中で、恐らく娘もわしと同じ思いなんじゃろうと思った。恐らくは娘はこれまで出会った人の中であいつが一番好きで、これ以上に自然なことがあろうか、と。それからわしは考えた、もしこの世に互いに愛情を感じ始めている若い二人が陰を作っている木々の下を純真な心を持って一緒に歩いていく姿よりも甘く美しい絵があろうかと。あれは初めてじゃった。わしはライフルを膝に置いて床の上に座り込み、二人を銃眼から見ていて目に涙が出てくるのを感じたんじゃ。百ヤードも離れていないところを二人は行ったり来たりしていて、二人の話は聞こえんかったが二人の想いは手に取るようにわかった。インディアンは大抵あまり手は使わないものだが、わしにはレナテーワが手を使って話しているのが見えた。大仰ではないが、自分の話している一つ一つの言葉をかみしめている風じゃった。それからわしは考え始めた、もしあいつがほんとにルーシーに結婚を申し込んでいるんであれば、それに娘が嫌でないのなら、どうすればいいのか。どうすればいいのか、どう言えばいいのか、わしは反対していないのにどうやって断わればいいのか。ベッツィが駄目だと言っているのにわしがいいとどうすれば言えるのか。

「とにかく、こんな風に考えている最中に、聞こえたんじゃ、子供が発した大きな叫び声と、それから甲高いわめき声が。紛れもない戦いのときの声が、恰もレナテーワ自身の口から出たかのようにすぐ目の前で響いた。わしはすぐに目を上げた。というのもわしは考えることに熱中して二人を見失っておって、自分のライフルを眺めておったんじゃ。外を見ると、そこには一瞬のうちに今までとはうって変わった光

景が写し出されておった。娘は死人のように地面に倒れており、レナテーワは致命傷を負ったかのようによろめきながら後じさりしておった。一方で、一人のインディアンの戦士がトマホークを振り上げて襲いかかっていて、若い王子の顔と額目がけて激しく強烈に、一度、二度、三度と打ち付けていた。顔の黒い化粧と目の周りの赤い輪から、そして体つきと頭につけた鷲の羽根飾りから、わしはすぐにそれがオロショティーだと推測し、それからそれが父親が殺された復讐であることを知った。インディアンというものはそのような責務を決して忘れることはないんじゃ。勿論わしはただじっとして、レナテーワのような古い友人があのように何の警告もなしに、去勢牛のように倒されるのをただ黙って見てはいなかった。それにわしの娘がばったり倒れており、娘も敵に殴打されていないとは知る由もなかった。わしは咄嗟に素早い動作で野蛮人に照準を定めると、次には引き金を引いたが、敵は若い酋長と同じように忽ちのうちに倒れた。わしは誰が見てもインディアンのような感じで大声を上げるとその場へ駆け出していった。しかしレナテーワは既に手の施しようがなかった。まだ息はあったが、意識は朦朧としていた。余りしゃべれず、全く要領を得んかった。時々あいつが歌を歌っているような音を立てるのが聞こえたが、それもすぐに喉から出るごほごほという音と喘ぐ音に飲み込まれてしまって、完全に途絶えてしまったんじゃ。わしの銃弾はオロショティーの石斧よりも効き目は素早く、そいつはわしがそこに着く前に事切れておった。可哀想なルーシーはというと、娘には銃弾の傷も石斧の傷もなかった。心に傷を負っておったが、それが怯えたせいなのか、それともわしらが考えていたよりも若い王子に熱い想いを抱いていたせいなのか、はっきりはせん。娘はあの事件の後あまり笑わなくなった。しかし、娘がレナテーワを愛していたかどうかはわしらには知る由もないし、わしはそんなことを娘に尋ねるような男じゃない。娘には開拓地のどの娘にも

負けんくらい縁もあって、それも良縁だったんじゃが、娘が一度も結婚しなかったことははっきり言える。皆さんの中には娘を見たことのある人もあるじゃろう。娘はそりゃあ美人じゃった。わしの口から言うのも何じゃが、娘は森の花そのものじゃった」

訳注

1「悲惨な不幸」、「水陸での哀れな事故」、「間一髪のところで助かる話」　いずれも『マクベス』第一幕、第三場からの引用。

2「ホースシュー・ロビンソン」　ジョン・ペンドルトン・ケネディ(1795-1870)の書いたロマンス(1835)。

3「聖書の中の乙女」　「旧約聖書」のサラ、レベッカ、レイチェル、リアを指す。

4「ダニエル・ブーン」　ケンタッキイ開拓で知られた辺境開拓者(1734-1820)。

5「ホー川」　ノースカロライナ州のチャタム郡からデイープ川とケイプ・フィア川に合流する。

6「ミコ」　チカソー族、チョクトー族、クリーク族などマスコーギアン語族の指導者。

7「赤い棒」　一八一二年テクムセ（1768-1813）が自分の戦闘部隊の magic symbol として用いた、赤く塗った棒。

8「リパリー族」　未詳。

9「全チェロキー族が武器を取った国を挙げての戦い」　一七五九―六一年のチェロキー族と白人との戦い。

10「ブロックハウス」　丸太造りで四面から射撃できるように二階が張り出した昔の防塞。

11「ミドルトン将軍がエコティーで部族連合を打ち負かした」一七六一年トーマス・ミドルトンはサウスカロライナ軍を率いてエコティーの村を焼き討ちにし、チェロキー族を降伏させた。